

安齋漫筆

四

73
6625
4



門 93
 號 6625
 卷 4



齊漫年卷之四

中もすくは鬢の附かゝ髪と申すは^{チヤウリヤシ}漢經並しと雖も其
 下よりほよほるゆゑなり付しとて經と云ふもの
 ありはさこそなほきりぬ一使髪は經と云ふは
 鬢と云ふは髪といふより髪と云ふは二重と合せて髪
 のたれま出せぬなりや
 一上より引りけりし牛若丸の事と申すは^{ハナハシ}信長入
 侍女十二段の巻なり其文の中は紫のあはたと切ひき
 たりしを更科に取らるるもさし^{ハナハシ}付するを
 今月ひて阿はし^{ハナハシ}の世の^{ハナハシ}前の名用とありたり

早稲田大学図書館
 第 26.11.5 袋
 蔵書

又さきさき所の押さききり言より付たり名は水
丁蔵人洲邊景榮より記しりて細金とてさ
し届切とせ居りてたしき所よりと書しり三平
何来向ふの所あるは平成を治るは後世の三
まこととす

一 おおそ勘門の本よりつりしを勘金の合れ門のすし
あつ樹の首とかけしきりくまを合は何れは
とも樹つりし又そをゆかるといふ等と二本結合
てそのとととと借てかくくあちのあささすは
件の勘金の首より樹本のこのよそのとととと
ささす

一 判判二のゆき一し各別のもく下は左の官令の中務
省の事して法由しるるのゆきとて一或いそゆと兼
一又也と法もあつりしりて一は判のひきりし
左の官の事し又も一付ておのれは有り判と
はありし官人のなりし居て法もと判はすしとの判は
定りおまの連署として今この官許名と書くあれは
るひのなけをまきまより又将きしひの二合とて
まきもてあらきしひの者の文とて書しし書しと
か今の判とてさるはかあしと名とすし判は
判とてさるは名とてさるひ

一 標南の元の切もありたて今も出づりし標南の

高き物よ今胎成とかなる事能りしきいふこと
しれと標高のいふことと市町をせ店と標して
たるもの一必き標高の店といふこと

一 中へてすまこと云のくるとい本徳多とつての他
物へ正長或は神と云ふ所は司りものことありと致
とんまといふ一帛一丈絶一疋布二端本徳二ある
たりし今之本徳つるもの一疋二疋とも出き此の
分るふ合て、本徳甚かし珠の帛絶在るはたぐいけい
はかし中々の本徳は何れあるも幻はすまもやう
ゆはけもまももあつて今の司り物くは神をま
ゆはけとけらるもや或は元来のもの今の本徳は

本徳といふこといふこといふこと本一と料は水
古に有りて今にありと世長或は本徳いふがれらるも本徳
のいふことまも神といふこと今のもいふこと概はわりと
たると用らるは何れもあつていふこととまも神
まもより勢あつてもけらるは今の仕人のいふこと
標といふ物といふは本徳多と云ていふことと標といふ
いふこと本徳といふこと概はわりとまもいふこと
唯も後川のいふこと概はわりと今にいふことと概はわり
いふことと化しといふこといふこといふことと神
南徳といふこといふこといふこといふこといふこと
志ていふ物といふこと下へ垂るはあつていふこと

一 短冊と短き冊と古紙の端を住く切く用ひのこま
けを平ひらきしきくし桐葉紙の端のあまあかして
何そのおしんはくをやるは竹葉紙をまきしてぬき
しきくをちきくしおしんをまきしきくしきくし
今のおく新とちきくをまきしきくし今世より用ひ短
冊は石紙の端をひる板紙の書き短冊とまきしきくし
碓氷寺書紙をまきしきくし竹葉紙の書
の紙とまきしきくし紙の端をまきしきくし
今世より短冊とまきしきくし今世より用ひ短冊
は石紙の端をひる板紙の書き短冊とまきしきくし
かき短冊とまきしきくし今世より用ひ短冊

らまきしきくしきくしきくしきくしきくし
より冊とまきしきくし文の端をまきしきくし
まきしきくしきくしきくしきくしきくし
かく廣き紙は文をまきしきくしきくし
前にも冊とまきしきくしきくしきくし
しきくしきくしきくしきくしきくし
紙とまきしきくしきくしきくしきくし
一 糸はしきくしきくしきくしきくし
しきくしきくしきくしきくしきくし
しきくしきくしきくしきくしきくし
しきくしきくしきくしきくしきくし
しきくしきくしきくしきくしきくし

一 たりけきい投よけきい河を傍のあきゆくしよ古ハ
角もたふさきとして物なうてちうさるこことさう
うくさういやあさの河を今のみいし横鼻禪の
こまをたふさきと河の流く毛乃之太不依岐と河
一 ともさうさまのあめをたふさきい

一 市平い今未平衣毎の時下金の切と細くくけて肉衣
しゆい佩として古平のいし肉衣しゆいあふ市平と
まゆも紙城帯をいめとけり市平といひて只唐のまじ
五のふけ平く井のり市平をいし或男のけんまをい
あめあまうりいれい流一也とあひして市平をいして
まいせたらうとさるい号しとも井のり市平いまきい

わあせらぬしきし流るい今のおひとだちよりいれくじ
てまらぬあさあし又市平いかにいし物あふまうい
しう市平のいしけいもあふまういしけいあふまうい
今とのいしあふまうい市平いけい今あふまうい
小市平の物あふまういしけいもあふまうい

一 知るい流い入河文章のいも字ぬ短くしこあふまうい
中いまゆい諸いまの諸太刀の諸甲の諸を長くして一筋
のゆのゆまうい物い下ぬハ下市平いあふまうい
あふまういしけいもあふまうい

一 市平いしきひもいけいしこまあふまういあふまうい
しききあふまういしけいもあふまうい

とて人の善のつけひもの地は四衣の二に懸けけりまら
所く産産のさともよこ又産る地と視得つけんは
とていれぬの地はあつて物に懸けり

一 おおきくとも四衣ののち残りて二合ありとも織合二合
そりのまの費を領もつけをさけぬらくといふは
ゆけは百おさるけは半おさるけは女の地とさ
わおさるけは女の地とさ二合あり

一 きまゝいふ所ののちやまづ半ありの地とま
まけり

一 伊良人の地すけは地はあつてのちともさのち
はくしお陽まらぬともさるけは半ありの地とさ

陽とてさ氣陽と補陽と陽のちともはも幸と陽
と奉とて幸陽とてまはあつてのちともさのち
まのちともさのちともさのちともさのちともさ

一 丁つきののち伊良の地とさのちともさのちともさ
入るちともさのちともさのちともさのちともさ

一 らの地はま籍のちともさのちともさのちともさ
いふちともさの地とさのちともさのちともさ

一 とてともさの地とさのちともさのちともさ
りやらの地とさのちともさのちともさのちともさ

一 神功皇后三胎と致すの時法の地は伊良の地とさ
けのちともさの地とさのちともさのちともさ

丹後有衣の凡多由く西く若流とよの病勢ありて
筆所なる長髪をくくひくくひくく伊予とて
日代判くくも人も皆も皆もく西ひくく下谷
也侍何よ仁本法をましくよの大小刀と白柄をくく甲互
の生甲より白柄をくく又大小の仁本法とく世侍神徳く
ハ流くまをくく大小と書きくくくくくくくくく
てあくくくく立髪丹前くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一 何とくくくく石印くくくくくくくくくくくく
石印のあきくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

流もくくくく又くく流くくくくくくくくくく
何とくくくくくくくくくくくくくくくく

一 春日女くくくくくくくくくくくくくくく
この小ッカくくくくくくくくくくくくくくく
舟くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
一 新くくくくくくくくくくくくくくくくく
此伝書くくくくくくくくくくくくくくく
一人め知くくくくくくくくくくくくくくく
の老日まの知事時くくくくくくくくくく
新くくくくくくくくくくくくくくくくく
知事人のつひり判くくくくくくくくくく

人形を人々へ分ちて

一 夫人臣の白石軍を考ふあり 太平記より自余の人々の後
〜〜〜書きたりし事他はこれ

一 〇物に委れし事ありて十〜〜〜は委成者も十に
後〜〜〜者としてそのいさく瑞のとやあり

一 八月のころにて三の草鞋の乳の八のありと三の月〜〜〜
の山鼻のありして紫束の束も〜〜〜の山鼻の
きよき履と〜〜〜といふ大鼻のや〜〜〜履あり

一 ちの家傳の度々のころり底邊の柄も〜〜〜物もあつて所
柄〜〜〜のり〜〜〜物に押し板〜〜〜とち〜〜〜を
とあ〜〜〜あり今の度々のわ〜〜〜物に〜〜〜

書院の書を得るゆゑに附き院の上を札と申すして書も物
古くは破墨破紙筆架をもとを分ちて尾竹の儀もしきを
得るゆゑに〜〜〜物

一 殿上の高敷より五枚と集て紙の字を〜〜〜や紙〜〜
五枚と〜〜〜し〜〜〜紙の〜〜〜書〜〜〜今中房の〜〜
用ひら〜〜〜の〜〜〜書〜〜〜今前も〜〜〜出すハ礼せの儀
の〜〜〜也

一 派の里利の儀〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜水櫃凡〜〜
の成り〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜

一 火の〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜の〜〜
〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜の〜〜〜の〜〜

すさりのそのの我子孫代々をのぬからんと誓まひしもの
子孫平人として産むる救ふ我らにけりしものをたのみ
すさりもいふ

一 足袋いりし我名の男の子は其の足袋もいりて足袋もいりて
治持達は甲全式すの益人と切りつりてささり部を止して
くみし好らるる荷の足袋は足袋といふもこれに治持と
まてのゆきして我おとらるる我あはれにささりといふ
まのいばるるをいふといふと又いばるる愈^化りてもいばるる
くまはるるささりの捕をかくしてはくささりといふの甚
ゆきてはまきくありし時本御をて足袋をいばるる
ま後一宮より用ひぬるありしとこれに捕まの足袋はとわ

兵庫老の松(法)いふまのいふ水と古後と夫いふまを
いふ

一 玉にはもまきくし珠をといふもいばるるま
まはるるたすまきく環の畧法に上なるいふもいばるる
ささり未女の尸のいふまをいばるるまといふの盗て刑を合
いばるるいばるるま

一 徳はまの杉羽よりつりしるい余りて荒るる人合とも
とささりし物とささりし人けすまきく名身けりしとも
平ゆかるといふゆきとすまきくいばるるいばるるま
くはりてささりせりしなり

一 恨はかこらるとい別の祥恨はすまきくいばるる恨ら

かこちの地をわけて云々といふは月夜に對して人を作つ時と
 やし月をわけてさすはつとありいふは花我の終りもてさ
 る人とのわらわぬはははははと云々のをわけてそ人のあ
 りやう今依りよあてこすうあといふはははは

一 石。ト云ハ和訓バシ。ト云ガ本語ニテ。シマリ。
 シワム。俗ニシワカリナトノ如ク物ノ凝リ
 定リヌルノ意ク信ハトハ石齒之盤ノ字ニ
 書ナラヘリ必大石ニテ齒牙ノ如ク便利ノ
 意ナリ

一 葛ノ根ハ藥品ニ用蔓ハ水ニ浸シ皮ヲ去リ
 編ニ連子ヲ品トシ是ヲ鴛鴦ト云テ水口ニ

テ制衣スルモノ是ニ葛籠ハ蔓ヲワラ子タル
 ノ名ニ葛布ハ蔓ヲ煮テ草ノ如クサキ紡績
 テラルニクストハ細屑ノ俵ニテ水彩ニツ
 キテノ名ニシテ艸ノ本名ハ葛也フチハ即
 鞭ニ古制衣コレヲ以テ鞭トス故ニ号ツク喪
 服ヲ葛衣ト云ハ葛布ナレハ

一 鴨ノ字ハアヒルノ故ニ一各水鴨ト云カモ
 ハ鳥ヲ正字トス

一 鯉アヒ木字右決明ノ鯉ハトコフシ

一 海士ノ謡曲ハ日本記允恭記ノ阿波国ノ海
 人淡路ノ島ニテ海底ニ入り大鯉ヲトリ得

ア頓死セシヲ擬作セシモノカ

一 章魚トハ手ヲキヲ以テ号ワククハ手ニコ

ハ子ニテ从テ禿ニヨリテ猶小兒ノ後ニ

一 生海鼠コノ物唐土ニ甚稀ニ小兒虚羸ノ症

人參トヲ用ルユヘ時珍食物本草ニハ海參

ト名ク

一 雞ノ字日本ノ俗字ニ是ハ延喜式和名抄等

ニ堅魚トアルヲニ合シテ作りタルニカツ

ヲハ堅キ魚ノ轉ニシテ即乾魚ノ夏ナルヲ

ワレニ通シテ生物ノ名ニモヨヒナラヒク

ルナリ

一 下總上總信濃おしほまき等麻の多しませし地ありハ

圓の名もまきまきと名付との上總下總いともツサノ

わきまひて昂ツサアサの物産之又麻をシナト云ハ本國の

方より今もあゆみ来ぬ人の事とシナと云はるは

まて他つともまきと信使ハシナヌノともゆききり

せし地ありし一移りぬし信使の由郡ニシナと云名多し

更科を晒しし地ありし一種科ニしし地ありし一舎

科麻を晒しし舎に種煮て皮を剥し地ありし又伊那郡

の内ニ麻績の地名あり即ち麻と績と云又神奈

一 伊勢貞純説虎豹ノ皮ノ尾鞘カケタルヲイ

カモノ作りト云イカリモノ、畧語ニ准之
 スヘテ尻サヤカケタルヲハイカモノ作ト云
 一八葉車九曜星ノ大小ニヨリ小八葉大八葉
 ノ名アリトイヘ凡細代車ニモ九ヨウノ紋
 付タリ今八葉ノ車ノ因ヲ見ルニ車ノヤ子
 ニ今テ云蓮華草ノ如キ草ノ花アリソノ花ニ
 ヲ必八葉アリユヘニ八葉ノ車ト云カ
 一或書云地下人惣領家ヲ本所ト名付テ地下
 又テ下知シ軍役ヲツトメ其所ノ土産ヲ貢
 メ三年一度大普役ニ在京ス
 一運歩集ニ蟹鳥ハ龜鳥ノ鶴龜ヲ付ルナリカ

ニカメ音通ナリ。

一喉ノイタムニ南天葉ヲキサミ塩ヲ交又ハ
 梅肉ニモミ合結ニ包ニテ合ムヘシ妙ニ
 一軍服盈たして意也表文のり布多し糸ノ中
 ニニヨリ妙のし
 一經尺糸かけをりしとき人一寸を横尺寸く經尺も
 一人物向を糸合式と堅一人寸を横一寸分或ハ堅一
 尺二寸三寸
 一刀ニ血ワキタルハ乾鳥糞ヲ以テ拭フニ血不
 殘落ルトナリ
 一車ニ代ハノ名アルハ八人シテ持雜物ヲ一輛

ニテ引故シ

一 錢十文ヲ一疋ト云フ昔駒引錢一文ヲ十文
ツノノサカヒノヘタテニ入テワナキシ故
十文ヲ一疋ト云

一 世と控くといひる人々世足見ても世別の心の傳へて
うき世の風よあひく異所

一 燒所妙薬 菜ノ葉ヲモミテ其汁ニ塩ト砂
糖ヲ加ヘヒクヘシ灸ノ火下リツヨキニモ
立所ニ治スルニ 血止紙 ツホ草モミテ
食梳三盈キリニ 血五分ツホ草ヲヨクスリ
梳ニ氷一盈ヲ煎ルツホ草ニマゼカキクテ

カスヲコシサレニキリン血ヨク末ニシテ
右ツホ草へ入スリ立ヨク文セ紙ニ七返引
之右ニアセンヤク三分加ヘ用レハ疵ヲイ
ヤシ痛ヲ止ルニ 右ノ紙ハ六月土用ニ清水
ニ十日ヒタシテ日ニ水ヲカユルニ又輕粉
少加ヘテイ工サル出来物瘡ナトニ付ヘシ
灸瘡久シク愈サルニ妙シ

一 日本出湯 物外有馬 凡土記云有馬郡五陸至山
石と湯湯々 新明三年秋行幸あり兼信之年
伏水として理湯不絶迄達久二年然其の去るとして再其
石徑のり姫湯と云病よぬ。吹田温泉も其の類人の

奇ありはゆきまう 湖陽伊豆境海。明安山中。那智
那智峠からふらふらの湯或は伊勢とも云すくぬの湯
那智峠より伊豆の湯口と伊豆湯アタリと伊豆の
湯尾の湯と云甲州湯の湯村と云湯と誤り行きて
乃時湯に入て乃時湯の湯全くと云。乃時湯の中
其化。此湯の湯り那須湯り那須湯行か大
洞湯口筑摩湯口沼津湯あ湯本クウノ伏屋
金木ヌトウカ島飛舟湯下呂山坂 平湯尾谷
蒲田 飛舟湯。肥後湯。肥後湯。昔老
湯。七之宮湯 行所云。○芦荊湯 行所云。陸奥は
この湯口名も湯草津 湯川 十ヶ野が行まぬ湯

志

- 一 ツキ 疾ノ疾ハ 疾ノアトナキ五分ワカケ
- 一 テ灸治スルノ
- 一 乃ノ字飲の同字ハ人ノノと云すも又也云ハ人ノ
- 一 天正十年六月 神池伊賀越の良 吉田 正 少休伝ハ
三人ハ大橋大馬九尾屋元三郎 小豆原小左衛門小左
衛門ハ江戸三年冬池一ノノ （まじり） 行甘あらぬ市
と号標を處らぬ水母也と云代々大字と実名と云
神池何レの御殿のけや標を標校と極て歎すハ四軍
川利運ニまじり標をともぬ家の紋標校と云。後屋也

正徳年中朝鮮人本袴衣冠
先親と通説之奴袴ハ侍後以上如先親律白四品ハ今
交律宗六位ハ淺黄ノ中ニ作付時衣冠ニ是袋物并
人波之と雖も所ノ先ノ衣冠ニ是袋物也アリ
○車馬帽子大ナリ凡ク侍後以上御威。車垂袴好
俗信車垂ノ大紋ノ封ノ之ニ俗信ノ堂上之月
ノ古也俗信ノ車垂ノ所ノ道途既成装束也
ノ也白布時ノ上ノ官車トノ時ノ城ノ侍妻ノ車垂
有ク是有代ノ代ノ菊ノ代侍妻ノ時車垂ノ所
例トアリト山科衣作ノ袴中位大正月御。山科信
是。○袴衣馬帽子大ナリ凡ク文照院ノ代六位

物名云々奴袴儀ノ案ニ位之月 袴也ハ位律宗法者
淺黄ノ平袴正徳元年ハ解ノ事奴袴律宗ノ
六位袴衣馬袴袴也下ノ之月 小刀編幅
○大紋車垂馬帽子大ナリ凡ク大紋車垂水色袴編幅
○布衣本袴衣一物之遺世布衣袴衣ノ名目ニ
裁直物名ノ一ノ馬帽子大ナリ凡ク奴袴山科袴云々
ノ作ノ昔ハ水色ノ位年圓平袴儀ノ事奴袴ノ中年以
也白ノ袴也今ノ所ノ律白也其ノ位凡ク也
厨ノ人ハ位年圓ハ儀袴也其ノ名ノ今地下ノ平袴
淺黄老美ノ所ノ袴ハ水ノ小刀編幅ノ赤袍平袴
表向ノとありと表向ノと素襖と云今袴ノ素袍と

と云りし

一 帰字ヲ井ノ假名アルト古老ノ傳合声假名ト云凡五十字ノ假名直抑合アリハナハシ是レキハ直音キイハ抑音ノ聞声ノ井ハ抑音ノ合声假字ハ顔鑑才十轉合音ノ内ニアリ故ニク井ノ假名ヲ用ル

一 三善為康朝野群載江曰然兼文合格之言官府格文者字ヲ以テ然ノ多用者如件トハ上ニアル文ノ通り然ルニ依テ如是ト云義之皇明通記注曰者ハ胡語然之辞ト

一 長秋牒ハ日野家三室戸有古来上下二卷今下範集

卷閱其書云折出ラシレハ見ワタセハナトハ。バノカサニワカヘハ廣大ニ見ルニトルニノニハ狭小ニ思ヒソメシニハニカヲニカヨヒ。思ワメシカハ。イヘトモニ通フ。是レ口傳ナリ

一 自音讓他人格ト云ハ粟散ヲソリザント清濁ヲユヅリカヘテヨム冷泉ヲレシセイト云カ如シ

一 平信經ハ入水ヲ好ム事アリ少少ナリト云レバ之年ナリハ分是好ハ好ハ緒方たふ女実玉ト云ルハ其由隱念テ舞ハナリト云ルハ其由の

のよこそ子版実子二人より一男此に序盛孝二男氏
初年明け去建久之年三月十日卯時一子夜
おれ白鳥山嶽に侍りしおれ至りあり

一 太政官 タヤウカン 紫宸殿 シシイ 南殿 ナニ 清朗殿

セイロ 南門 ナモン 雅南ノ唱近キヲ忌故ノ南庭

タラ 極官 キョククワン 極勢 キョクセウ 大大臣ノ職分ノ極

タラ 番 タラ 大納言ノ自称

一 東宮大夫 中宮大夫 左京大夫 右京大夫 修理
大夫 大膳大夫 ヲ六官 八品トス 是ハダイフ
トヨム 大皇后宮大夫 皇后宮大夫 三職トス
コレモダイブトヨム 左近大夫 右近大夫 右

衛門大夫 掃部大夫 ハタイウトヨム 五位ノ
異称

一 神武 ジンム 顯宗 ケンソウ 綏靖 スイセイ 孝元 コウゲン 崇神

スウジ 垂仁 スイニ 反正 ハイン 崇峻 スズジ 天智 テンチ

持統 チトウ 元明 ゲンメイ 元正 ゲンテイ 淡路廢帝 タンロウヘイテイ

平城 ヘイセイ 仁明 ニメイ 陽成 ヨウテイ 朱雀 シュクワ 冷泉

花山 カサン 白河 シラカハ 堀河 ホリカハ 崇徳 スウトク

近衛 キナエ 順徳 ジュントク 朱雀 シュクワ 大宝 ダイホ 慶雲

神龜 カンキ 天平 テイヘイ 天平勝宝 テイヘイショウヘン

天平神護 テイヘイシンゴ 天長 テンチョウ 兼和 ケンワ 嘉祥 カサマサ

仁壽 ニシユ 元慶 ゲンケイ 仁和 ニニョウ 寛平 カンヘイ 延長

エヒチ 天慶^{テンキキ} 永觀^{エイカン} 長保^{チヤウホウ} 海安^{カイアン}
 ヨウ 永業^{エイゲツ} 長寛^{チヤウケン} 仁安^{ニアン} 承安^{シヤウアン} 正治^{テイジ}
 シヤウ 建永^{ケンヤウ} 建保^{ケンポ} 承久^{シヤウキウ} 寛喜^{カンキ}
 貞永^{テイエイ} 文暦^{ブンリク} 仁治^{ニジ}
 一 政所 拱関ノ室 御臺盤所 或御臺所 大目ノ室 笠原中
大納言宰相 以上之室 室 上庭部殿上人
 一 伏見所 口所 何れも十字の形あり 形書のみと云ふ
 二志廊内 何れも老と云ふ 祢と云ふ 後四の内と
 踏府ノ二所 此の二所と云ふ 今二所所と云ふ 二丁伏見と云ふ
 一 形書本と云ふ 似たり 平清本所
 一 本幣ハ衣衣冠ハ 乃衣衣衣重ハ草之

一如木ハ白練ヲ着ス 袍ニ似テ 制衣別ニ下赤大
 口表袴帯ヲシテ 毎刀之
 一 芝神明社中ニ賣ル 小槌ヲ社人ハ手筈ト云
 モト 雛具ナル 故藤花ヲ畫ク 一年上方ヨリ
 下セシ 船遅ナハリ 雛ノ節ヲ過テ 着船セシ
 エヘ 此市ニ出シテ 賣リタル ヨリ 例トナル
 右小槌ヲ京大坂ニテハ オクイ 槌ト云 弥生
 ト 重陽トニ 此小槌ヲ賣ル 京師ニハ 重陽ニ
 モ 雛遊ヲスル 故ニ 土佐日記ニ 山崎ノ小槌
 ト書ルハ コレニヤ
 一 乃衣衣衣重ハ 乃衣衣衣重ハ 乃衣衣衣重ハ

とて、
付肩（節）遠く、
先の号、
付く、
今、
わ、

一 御太刀ヲ友ニキツハ持ニ取ニ今キツハ
ヲ通シ又ハウツナト云ハソリヲウツヲ云
ナリ
一 小十刀ニハ鐔ナシ太刀ニハ鐔アリ故ニツ
ハ加トモ云ナリ

一 唐国ノ一里ハ本邦四町三十九間余ニアタ
ル十里八十町三十間余百里八十二里三十
三町余千里八百二十九里七町羊余ニアタ
ル

一 刀ニノシ付ト云ハ銀ラウスクシテ鞘ラ一
面ニ包ミタルヲ云。裏ハカリツ、ミタルヲ
ウラノシツケト云。金ニテツ、ミタルヲ
金ノシツケト云ナリ

一 類聚国史三十一弘仁三年二月辛丑幸神泉
苑覽花相命大人賦詩賜錦有羞花宴之節始
此矣

一 強紙ハ裏方シタル白紙也

一 詔書ノ御画ハ昔八月付ノ下ニ勅筆ニテ日ヲ書セ玉フト云然ルヲ灵元院御代ヨリ勅書ノ内イワレニテモ一字御筆ニテ書セ玉フナリ

一 齊宮ハ後二条院以後断ニ帯刀ハ禁中滝口仙洞ノ北面武者所ニ同世人ノ内ニテサアリ上首ニ瀧口ニテハ一臈ト云勅履尉ハ兵衛尉ナリ弓箭ヲ帯スルハ皆勅履ナレトモ専ラケヒイシヲ云ク大内女ハ周防女ナリ子葉女ハ常陸女ナリ大女ト称スルハ其家

本ト云心衣冠師三宅近江カ家ヲ大十文字屋ト云モ十文字屋ノ内ノ家ナト云フ也

一 非雜色 雜色ハ下者ニテ定レル色ヲ着セサル故雜色ト云昔ハ官ニモ進ミタルユヘ良家ノ子ヲ任スルヲ我厚抄ニ有ソレニナラサルヲ非雜色ト云衣雜色今京ニ四人アリ

一 官位相當ハ官先位後ノ官ヨリ位高ケレハ位先官後ノ官位相當ニサレハ位ヲ先ニ書守ヲ書シ大切ニスル心ナリ位高キ人下官ヲワカサトルハ自由ニスル心ニテ行ト書

侍従ハ相當五位之一三位ノ侍後ハ攝家ニ
カキルノ常ハ四位五位ノイワモ本官ヲ書
ヘキノ帯刃長一人先生一人後生先ハ先ニ
ナリタル心ナリ先生^{センシヨウ}又先生^{センジヨウ}
トモヨミナラハセリ三位中將ハ清花ノ自
分ニハ夕、中將トハカリ書ル、ナリ將監
ハ六位ノ爵ハ五位ノ太夫將監ト書ノ樂人
ニ武官ヲカタルヲハ行幸ノ時鉾ヲ持故ノ
ケヒイ使ニ判官ナシ^ヒ門尉ナクケヒイ
シノ宣旨ナキトキハ六位ノケヒイ使ノ宣
旨アリテ五位ニナリタル時大夫判官ト云

大政大臣ハ職ナシ関白攝政ハ職ナリ
官ニ非ス業平朝臣ナト云ハ他人ノ云フコ
自分ヨリハ名ヲ朝臣ノ下ニカク^レ他人ヨ
リモ朝臣業平ト朝臣ヲ上ニ書ハ四位ノ時
ノ下ニ主殿^{ニスラン}禁中ノ主殿ハ頭ノ字ヲ
書春宮ハ首ノ字ヲ用主膳監ハ春宮ノ從
人ナリ監ハアツマリ所ナリ禁中ノ内膳ニ
同シスセシト書ハ假名物ニ書時ノ下ナリ
彈正臺トハ役所ナリ余婦トハ婦人朝廷ノ
誥命ヲウクルヲ云^レ
一テクル 長柄腰裏白雲アシロツハミ以

人の名を丸と云ふ事と付くものや、不浄と入る器あり
不浄ハ鬼魔の類ハも嫌はずの事、鬼魔の類ハ
近づく事ハ心とめて名あり丸の事と付くれや之
初若と阿吉久ると云く

- 一 鷲口瘡小兒胃中ノ熱毒ハ昆布ヲ黒焼ニメ
細末シ鳥ノ羽ニ付テ舌上口中ヲハケハ其
星焼ニ付テ白キモノ皆トレテ愈ルハ黃連
ヲ細末メ蜜ニテトキテ付ル妙シ之馬疔俗
蓋ヲサト云清昌并庶湯妙シ
- 一 初生ノ小兒ヲ洗フヲ唐土ニハ三日ヲ待テ
浴スルナリ

一 粥面 カニノウハツミナリ 稠粥 カコカユク

- 一 薺鑑説ニ小兒一歳以前ハ虎口ノ三関ヲ見
テ病ヲ知ル一歳以後五歳迄ハ医ノ大指一ツ
ヲ以テ其上中下三部ヲ診スヘシ虎口ノ三
関トハ小兒右ノ手ノ食指ノ内ノ三筋ノ
間ヲ云ニ下ノ才一筋風関中ノ才二筋氣関
上ノ才三筋命関ト云コノ三筋ニ種々ノ故
ヲアラハスヲ見テ其病ヲ知ルナリ

一 弓城ノ事付致元服の事此垂名ノ所名アリ入り男
ノ事初ノ事ハ少来ノ事付致元服ノ事ハ
内政始メ事ハ付致元方ノ伯母トシ母ノ母トシ母ノ母トシ

一 大後の虎此母平塚の者、宣平宣月宣日、生る三虎
少ありと云々、宣平の時又死して、大後のおの長者兼都
言傾ぬきて、我姑と云

一 島田彈正忠利、政補江戸町奉行、好和歌刺髪
幽心、大橋立慶名重保、叙法印、東山利章字
子文号栗子、黒田家臣有罪、謫奥列南部
水戸光国字德亮、常山子或率然子卜号、永
井信列尚康字孚中号壁陰軒、又稱閑適子或
号鳧蔭庵、服坂淡列安元字藤享号八雲軒
如和歌、贈傳漢書教子卷、榊原式部大輔忠

次好和歌、有和書教千卷、那波道因名信吉
称平八郎肥後加藤氏、仕へ後仕紀列号活
所子、堀正意号杏庵仕尾列叙法眼、野間
三竹官醫法印玄琢子字子苞号静軒、依川田
正次昌俊子住江戸、藤原廣賢烏丸、相光
廣子之号六角生頭仕日先尊敬法親王在東
叡山、人見友元官医元德長子卜出、姪一
名節字伯毅、建仁寺大統庵、慈称長老号古
澗、南禅寺金地院崇傳々長老、将軍家三代
二仕へ為僧録司、賜木充国師号、又稱以心叟
一 本朝皇子為親王、後也家者俗称曰入道、宮又

曰入道親王其為僧而後。親王宣下者曰法親
王又常脫履祝髮者曰法皇其居所已為曰棲
曰御門跡所謂宇尋帝居仁和寺之類。後世
貴族沙門住持其所則推之曰御門跡或單稱
門跡又太子宫為春宮坊故御門跡陪從者又
借其名遂稱坊官皆流傳也。侍臣從法皇
其出家住寺院者謂之院家相繼住持者多自
稱院家亦是欲表其非凡僧。尼院亦然。道春院
一清著筆談。廣中野中ノ陽燄ヲ望ハ如波濤
如奔馬ト云。本邦陸奥出羽ノ影沼武藏野ノ
外水コノ類歟。

一急喉痺ニ燈盞内ノトホシ蜂ノ油ヲス、リ
テ吉。魚鳥骨咽ニ夕チタルニハ飴ヲ大豆
ニ粒ホト大サニ丸メ吞ヘシ又帶ヲトキテ
立テ頭ヲサケサカサマニナリ股ノ間ヲミ
ルヤウニスレハ自然ニ鯉ヌケ出咽ニ下ル
之。呃逆生姜二三片カミテ吉又汲タテノ
水ヲ多ク吞ヘシ。鼠血。棕櫚ノ皮ヲ燒灰ニ
メ鼻ニ吹入ルヘシ又冷水ニ足ヲヒタシテ
ヨシ
一十字引ノ饅頭ト云。東鑑ニアリ案ニ饅頭
ノヨク蒸シタルハ蒸破シテ面ニ十字ヲ

ナス^トラ^ラ云^{ナル}ル^レ本州穀部^ニ蒸餾^トア
ル^ハマン^ジウ^シ

一 右大将家時ハ畿十町畿子所ト云何郡何郷
何村ヲ宛行フト云^シ足利家ノ時ハ幾貫幾
千貫ト云何郡ノ内何千貫何百貫ノ分宛行
ト云^フ信長以來幾万石幾千石ト云^シ
田一坪^ニ苗一把百坪^ニ百把コレヲ百目ト
云^コノ積リ^ニテ千坪千把植コレヲ一貫目
ト云^フ十貫目ヲ百石百貫目ヲ千石ニ當ル^レ
上下田ノ位ニヨリテ一定ナラス古來兵糧
米^ニ皆穀ヲ用テ廩米ト定ムソレユヘ^ニ

神祖御判物^何拾俵令附与ノ御書アリ右
扱百石ヲ摺米ニシテ四拾石又ハ三拾五石
ニナルソレヨリシテ四ツ物成三ツ五分物
成トナルナリ

一 本邦の^{假名文字ハ}之れハ^ハ某士^ハの^ハ行^ハけ^ハる^ハもの^ハ也^ハ
ワキ^トシ^テ文^ヲま^とり^てゆ^りの^ハサ^ル事^ト也

一定家^ハ館^ハニ条寺町ノ角ナリ表ハニ条方
裏ハ冷泉^ノ嫡子^ハ表ニ住ミ^テ廩子^ハ裏ニ住
スユヘ^ニ為氏^ヲニ条家^ヲ相^ヲ冷泉家^ト稱
ス

一 中院通村道通院序

すなわねすゝめはたけしきんをくま

ちあてのま

一 帳 竹ヲ細クワリテ糸ニシテクミソレヲ
黒ク塗り裏ヲ紺ニテ張テヘリヲ付書ヲ包
ム物ナリ高雄山一切経ノ帙是ナリ

一 春ノ人トシテクマヤ 道折ル後けい山ものも字野
ありとのいほふそまもくさき西へくまめきて
まふらとくまらういづつくま細ハ度てくまらこ
斗りいねくもくまいんくまら山くちかひんて
らまくくまらく或は説きかかすくまらくくまら
もるき神くまの訓とくまけとくまらとくまら

斗の字新と入て中一又はけいマ地人のくまら
まら天く山く地くえゆらくくまらくくまらく
けいのくまらくまらく百のくまらくくまらく
くまらとまらて今日くまらくくまらくくまら
極のくまらく何くまらくくまらくくまらく
神くまらくくまらくくまらくくまらく
くまらくくまらくくまらくくまらく
くまらく有明のくまらくくまらく
くまらくくまらくくまらくくまらく
くまらくくまらくくまらくくまらく
一 かうくまら ちあてはく虎のくまら 去る七年林彦

吉原日後之神十三代村々を更鹿明くし 為ハ之由付
 此神亦く重住ち子奉川勝ノ少お付 千軒多かりし
 と申以式之為しこりして何勝より竹田今も其儀ノ
 市ノ中七ヶ倉 四町次第 今も去子多し少くお付有
 仏は之傳授あり之精をうりてし 一ノ所也一也
 ち久保とけりめ 余の非を信作すは予 仏法ハ是也大
 師ハ其傳授可なり 非ハ其手後より傳授せし
 予今とけり昔人言昔ハ布基よこありを留りし
 此衣也 布基 採かりし 一ノ衣也 此衣とモテ採ト
 云 上下の條風立波ハイカニモスキ次第 剛子ハ少後
 一腰ありの紐いし 此衣ハ地佩ハ地工 紋不

一ノ少後ハ不あり 上下もを縫合あり 地佩ハ少地の
 走りし一ノ所ハ少後ハエおし上下も 肩又カズ小ツて
 物ニカス式之のツ刺しハエおし上下も 肩又カズ小ツて
 太鼓上下の衣ハ不あり 昔人言 奈良新神ノ太鼓と
 申すノ儀あり 此ツレ程云 三人ハ在基号剛子ハ上
 名人ノ子とし 紐と刺し 一ノ太鼓と 一ノ所也一也
 此後冷味あり 履物ハ一ノ付あり 一ノ所也一也
 塔の者ハ一ノ補佐と申す 南都ハ 持反之程ノ所
 十ヶ倉 補佐ノ乃ハ一ノ所也 烏帽子上下と云 此衣ハ
 一ノ他ハ一ノユルナレテ 我ハ太鼓ハ一ノ所也一也
 一ノ所也一也 一ノ所也一也 一ノ所也一也 一ノ所也一也
 一ノ所也一也 一ノ所也一也 一ノ所也一也 一ノ所也一也

能の面とらけりしるく笑時ヲノボリヒゲニシ大ベシヲフ
アリニ直ス而とさゆの事ありて是の心とあるものありて
ふいねの相原之智ヲテ十三代年教ニ言む十年ナリ
等ハ其者トシて名字ハ長命今長命次帝太夫の子
トシテありて名ヲトシテありて名トシテ名ハ仁也
持律玉破るの事ありて名トシテ名トシテ水巴位
也又長命トシテ名トシテ名トシテ名トシテ名トシテ
名トシテ名トシテ名トシテ名トシテ名トシテ名トシテ
今春字ハ市ノ才子トシテ名トシテ名トシテ名トシテ
あれしと云ふ也云々弘は名トシテ名トシテ名トシテ
すヨリ見ユニカおはははははははははははははははは

心切肝要之昔金剛又多樹と云能の仕手有り新の能
歌とせし持く甲子の能と云云と云云と云云と云云
楠と云々と名人八師を扱して云アノヤウナルは
ハセ又トク能ハ夫人之位の法不のののののののののの
仕舞ハ文句エアタリタルものもせぬもの也

- 一 高泉ハ隱元ノ弟子惠門ノ嗣法ニメ隱元ノ
法孫ノ惠門ハ隱元ノ唐山ニテノ才子ノ隱
元七十ノ賀ヲ祝メ惠門ヨリ高泉ヲ和僧ト
シテ日本ニ渡セシカ日本ニ止リテ不帰ノ
一 誓文會誓主惑ト云モ河内春日郡ノ人仏工
也世ニ春日作ト云ハ誓文會作ナリ面ニモ

春日作アリ同人叙

一 桂樹 嶺南子ト号ス花園兵部返ト云芝山
家ニ仕モトハ多田ノ社人ニ後芝山殿ヲ拜
シ多田兵部又源四郎トモ云江戸尾川ホラ
遊行ス

一 老人雑話ハ江村專齋ノ物語ヲ其子伊藤宗
恕書集タルナリ專齋名宗具倚松庵ト号ス
永禄八年ニ生レ寛永四年六月百歳ニテ卒
ス後水尾院ヨリ御杖ヲ賜フ其時和哥アリ
一 ヤケトニウニテ付ル時ハ即坐ニ痛止ムコ
ウヒニ吞テ妙ニ魚骨ノノトニ立タルハ芭



蕉ノ晚秋ニナリテ葉ノ破レタル中ヨリ卷
葉出タルヲ刻テ黒焼ニメ吞ヘシ甚妙ニ又
ヤキミソヲ白湯ニテ吞ベシ

一 細代樂ノ本式ハ赤ヌリヲ云ナリ
一 堂上ニテ指燭ト云ハ松ノヒテヲワリテ紙
ニツ、ミ火ヲトボサルニナリ紙ニツ、ム
ハ松ノヤニ年ニ付ユヘシ

一 装束ニ豆色ト云ハ白茶ノヲク
一 是是と云フハ帯の巾袖をさすかちて帯をさす後
かちてと云フハ是是と云フハ腰の巾袖をさす
是是中よありておちく肩ひけり

176
6
4

一 振ノ字手ヘンナリ今本ヘンニ書ク水ヘン
ハシヨウノ字ニ今手ヘンニ書テ八月立テ
アシ、本ヘンニ書テ中へ点ウタサルカヨ
シト云説アリ手ヘンヨシ目ニモ立ズ俗用
ハ本ヘンニテモヨシ
一 紙吉事ニハ紙ノ表へ書凶事ニハ裏へ唇ト
云フ昔ヨリアル事ナリ

安齊漫筆

